

仁賢天皇埴生坂本陵整備工事箇所の調査

仁賢天皇埴生坂本陵の墳丘と前方部正面側外堤の裾は長年の波浪による浸食が進んでおり、護岸工事を行なうことになった。工事に先立ち平成三年十一月十一日から二十八日まで事前調査を行なった。この間、考古学・地質学・土木工学の専門家に現地視察を依頼し、助言をいただいた。

調査は墳丘側に一八本、外堤部に六本の計二四本のトレンチを設けて実施した(第1図)。トレンチの規模は墳丘側が長さ二一～六メートル×幅二～四メートル×深さ平均一メートル、外堤側が長さ二～四メートル×幅二～四メートル×深さ平均〇・八メートルである。

一、墳丘部

基本的な層序は次のとおりである。

I層 表土。主に腐蝕土で、濠内ではヘドロとなる。埴輪、陶磁器、瓦などが混じる。

II層 崩落堆積土。しまりの悪い淡黄灰色や暗茶褐色系の粘質土。崩落は時間をおいて数回くり返されており、三層が認識できる(II a～II c層)。礫や埴輪が混じり、II a層には陶磁器も加わる。

III層 後世の盛土。しまりが良く、混じり気の少ない黄色系の粘質土で、礫や埴輪が混入している。

IV層 墳丘盛土。固くしまった灰紫色土と褐色土の混入層で、第6・

7・8トレンチでは紫色粘土がシマ状に入っており、版築されていることが伺える。

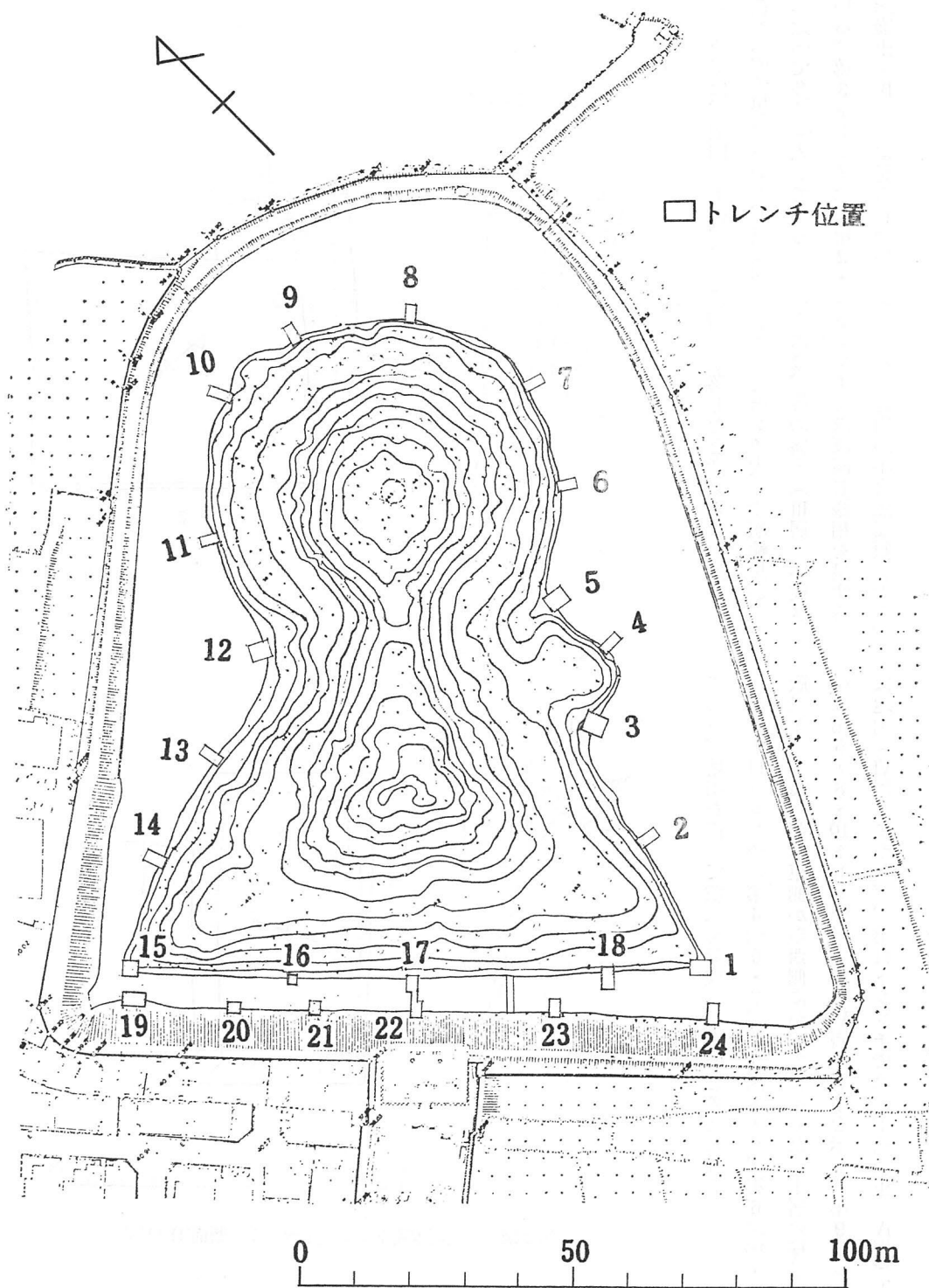
V層 水成堆積土。長年の波浪によって墳丘盛土や地山が浸食され、そこに堆積した灰色や灰褐色などの粘質土。濠内では崩落した葦石と見られる一〇～三〇センチ大の礫や埴輪、須恵器、陶磁器などが混入している。

VI層 地山。淡灰褐色・暗茶色・白灰色などの粘土あるいはシルト層で、固くしまっている。

遺物は各トレンチのIV層とVI層を除く各層から出土しているが、完形品はなかった。また、埴輪では樹立した状態のものもなかった。各トレンチの状況を次に述べるが、I・II a層はほとんどの場合省略する。

第1～5トレンチ(第2図1・2、第3図3・4、第4図5)

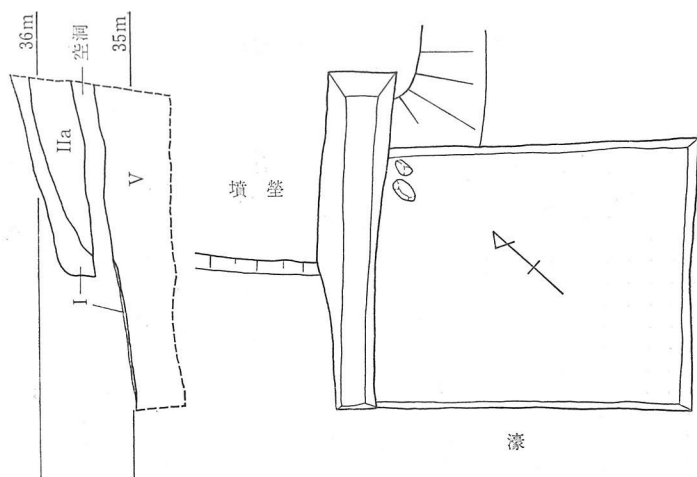
前方部の南東角部から東側くびれ部にかけて設定。土層の状況から見ると第1と第4トレンチが様相を同じくし、第2・3・5トレンチが近似する。第3トレンチでは地山の状況を異にする。第1と第4は水成堆積土(V層)の上に崩落堆積土(II a層)と表土がかぶさっているのみで墳丘盛土(IV層)には至らなかった。第1トレンチのII a層から径二〇～三〇センチ大の礫が二個出土したが、崩落したものである。第2と第5トレンチでは地山(VI層)面を確認した。第2トレンチでは地山の上に水成堆積土があり、その上に墳丘盛土(IV層)が僅かに見える。第



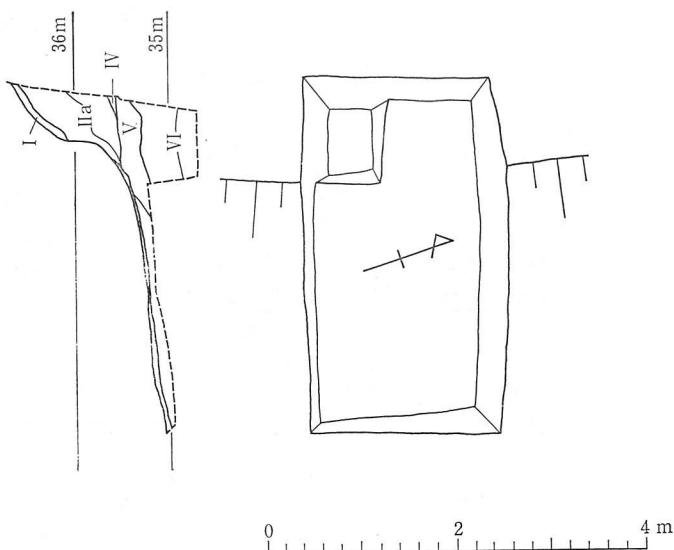
第1図 埴生坂本陵調査箇所的位置 (1/1200)

5トレンチでは、地山の上に、早い段階で崩落したと考えられる崩落土（Ⅱb層）が堆積しており、礫（径一〇～二〇センチ大）や埴輪片が、他所に比べて多く混入している。この上には、後に盛土（Ⅲ層）が成されている。第3トレンチは、第2・5トレンチとほぼ同じ様相を呈するが墳丘盛土（Ⅳ層）は見られない。よく見ると地山が不自然な傾斜をし

1. 第1トレンチ



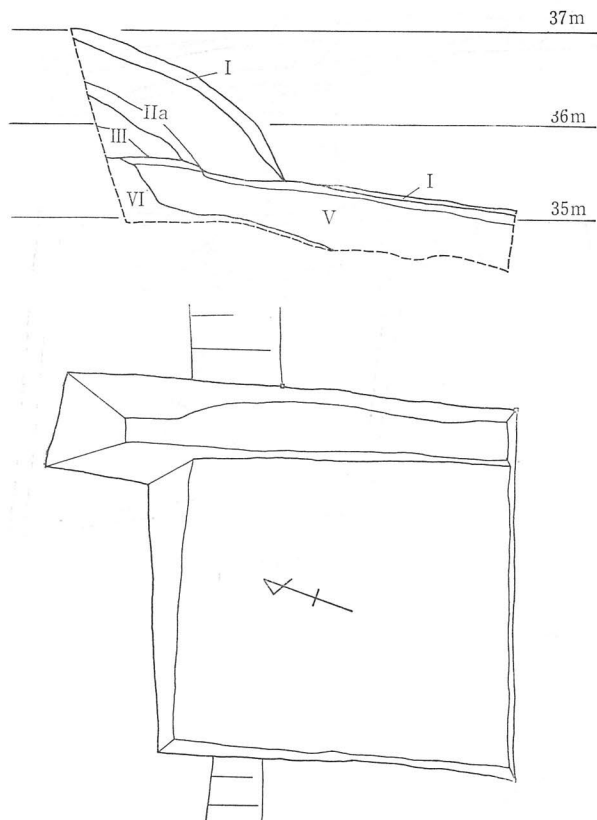
2. 第2トレンチ



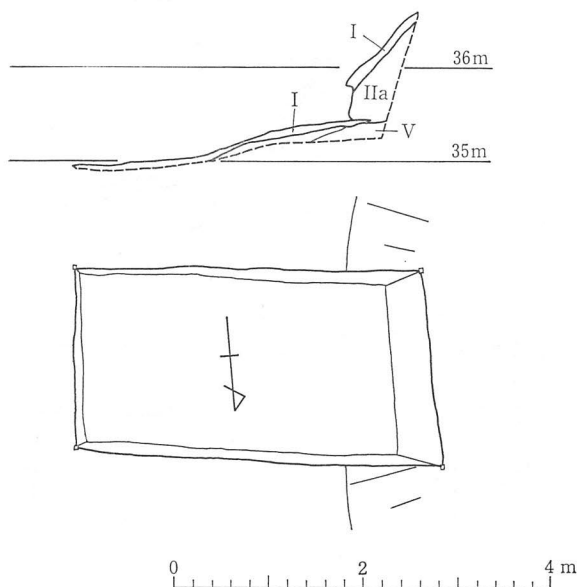
第2図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(1) (1/80)

ており、地山を削って墳丘を形成したものと考えられる。第6～11トレンチ（第4図6・7、第5図8・9、第6図10・11、図版二1）後円部の東側から西側にかけて設定した。土層の様子から言へば第6～8・10トレンチがⅠ層～Ⅵ層の層序を示し、第9トレンチでは地山（Ⅶ層）に至らず、第11トレンチでは、墳丘盛土（Ⅳ層）と断定

3. 第3トレンチ



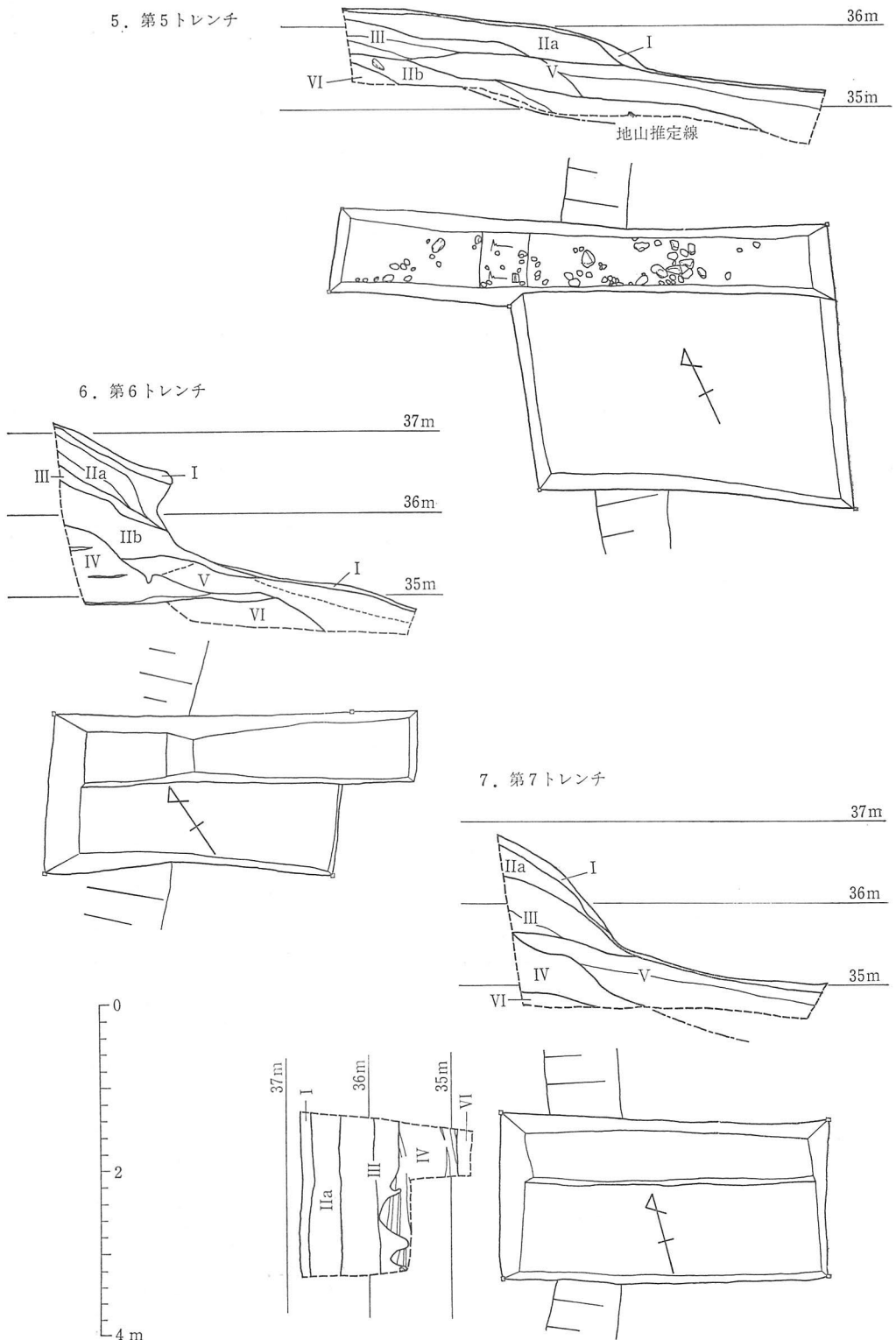
4. 第4トレンチ



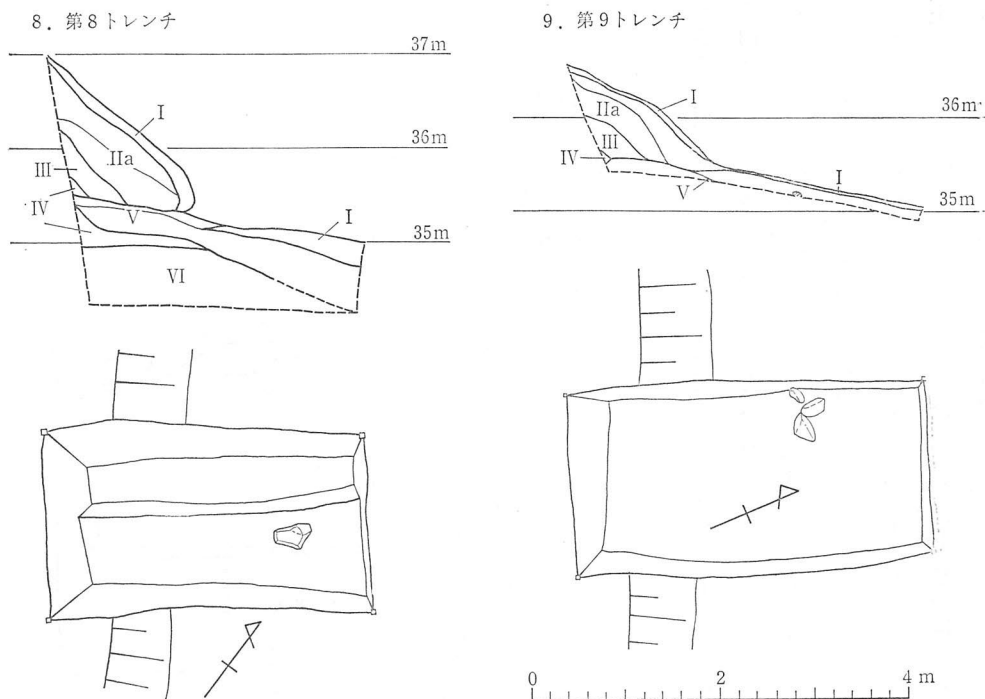
第3図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(2) (1/80)

できる層に至らなかった。第6トレンチでは地山を平坦に削って整地した上に紫色土混じり褐色土(IV層)の版築が確認できた。その後水成堆積があり、その上に崩落土(IIb層)がのっている。第7トレンチもほぼ同様であるがIIb層が見られない。第8トレンチは埴丘盛土が侵食を受け、できた隙間に水成堆積土が溜っている。濠側から長径四〇センチ大の礫が一個出土したが水成堆積土からなので崩落したものであろう。第9トレンチも埴丘盛土層の高さが第8トレンチとほぼ同じで、水成堆

積土中から二〇〜三〇センチ大の礫が数個出土したが、これも崩落したものであろう。石は寺山安山岩である。第10トレンチでは地山が濠側で自然の傾斜を示し、埴丘側では水平に削って整地し、その上に盛土(IV層)している様子が分かる。この盛土は大半が削られ、この上には後世に盛土(III層)が成されている。濠側で一〇〜二〇センチ大の礫が数個出たが、水成堆積土中からの出土である。第11トレンチは地山の端がほぼ垂直になっており、削平されたことが伺える。波の侵食によって凸凹



第4図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(3) (1/80)



第5図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(4) (1/80)

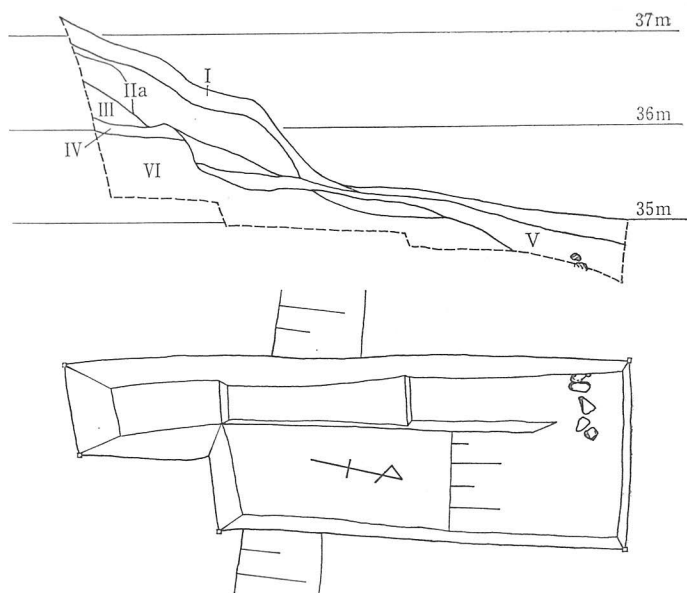
になった地山の表面の上には水成堆積土が溜り、さらに盛土(Ⅲ層)が成されている。トレンチのほぼ中央から一〇〜二〇センチ大の礫がまとまって出土したが、前述のトレンチ同様、水成堆積土中からの出土で、崩落あるいは投棄されたものと考ええる。

第12トレンチ(第7図12、図版二二) 北西側くびれ部に設定。幅を三・五メートルと他のトレンチよりも、やや広めに掘削した。基本的には墳丘盛土(Ⅳ層)を除く、Ⅰ層からⅥ層までを確認したが、地山上に早い時期に崩落した淡灰褐混り粘質土(Ⅱb層)が堆積している。くびれ部であるため濠の幅が広く、他よりも水の影響を強く受けて地山が削られ、濠内に堆積している様である。また、ここには土砂と共に崩落した葦石が多く集っており、層位的にも、先述の崩落堆積土(Ⅱb層)、その後溜った水成堆積土(Ⅴ層)、後世の盛土(Ⅲ層)の各層内に混入していた。これらに対して地山面で確認された礫があり、これは、本来の葦石と見て良いであろう。

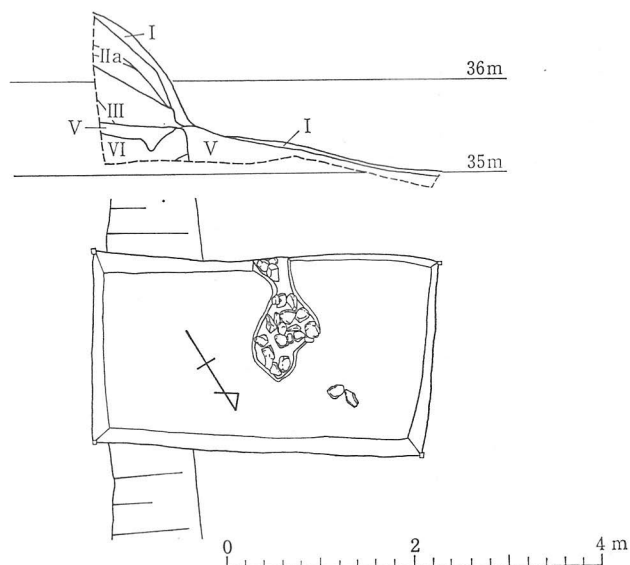
第13〜15トレンチ(第8図13・14、第9図15) 前方部西側に設定。第15トレンチは隅角部に設定。各トレンチともⅠ・Ⅱa・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層は共通しているが、第15トレンチでは地山層の上にしまりの良い淡灰褐色土(Ⅳ層)がある。東隅角部や第14トレンチで墳丘盛土が出ていないことから、当初、墳丘盛土はもう少し奥にあると考えたが、平坦にされた地山の上にあることやしまりの良い灰紫色系の

土であることなど他のトレンチとの共通点から見て墳丘盛土と考えられる。第13トレンチでは墳丘盛土が未検出で、地山の上に水成堆積土が厚く溜っている。また地山面から三〇センチ大の礫が出ており、葦石に用いられたものとも考えられるが、この礫の出土したあたりが墳丘の裾であるとも言えない。第14トレンチの地山の上は崩落土(Ⅱc層)、水成堆積土(V層)、近世の盛土(Ⅲ層)が重なり、Ⅱc層とV層は垂直に切られている。幕末の修陵によるものであろうか。切った後には水成堆

10. 第10トレンチ



11. 第11トレンチ

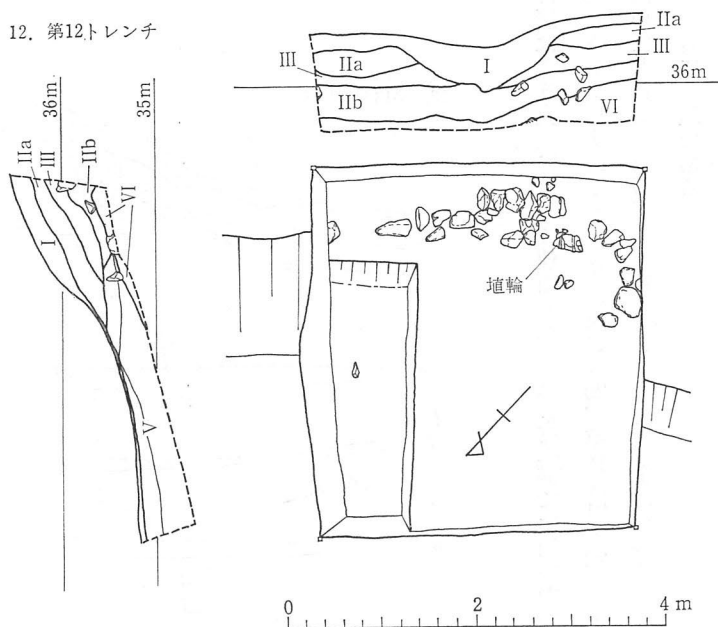


第6図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(5) (1/80)

積土が溜っている。地山面と濠側の水成堆積土中から一〇〜二〇センチ大の礫が出土しており、どちらも崩落したものであるが、前者の場合は本来の葦石が早い時期に崩落したものと考ええる。

第16〜18トレンチ(第9図16、第10図17、第11図19)前方部正面に設定した。第16トレンチと第17トレンチの層序は第17トレンチに墳丘盛土が出ていないことを除けばⅠ・Ⅱa・Ⅲ・Ⅳ層が共通して確認できる。第18トレンチでは墳丘盛土(Ⅳ層)は出ていない。第16トレンチで

12. 第12トレンチ



第7図 植生坂本陵トレンチ平面および断面(6) (1/50)

は地山を削平し、その上に暗褐色シルト(IV層)を盛り、墳丘を構築している。このIV層中には一〇〜二〇センチ大の礫がみられるが、土中にあるため葦石とは思われない。この後に一度浸食を受けた後、後世になって盛土(III層)されているが、再び浸食されている。第17トレンチでは他のトレンチに比べて地山が高くなっており、その上には後世の盛土

と思われる淡黄褐色シルト(III層)の末端が僅かに見えている。なお、この第17トレンチと外堤側の第22トレンチの間の濠内(現濠幅約六メートル)を幅約一メートルで掘り下げたところ、ヘドロ表面下〇・八メートルの深さで灰色砂質の地山に至った。葦石及び遺物の出土はなかった。第18トレンチでは地山の上に水成堆積土が溜った後、ほぼ垂直に切られており、その後についた水成堆積の後、何回かの土砂崩落があったようである。水成堆積土の上の暗灰褐色土(IIa層)は拳大の礫を含んでいる。

二、外堤部

前方部正面に対する外堤(延長一三〇メートル)に6本のトレンチ(第19〜24)を設定。層序は次のとおりである。

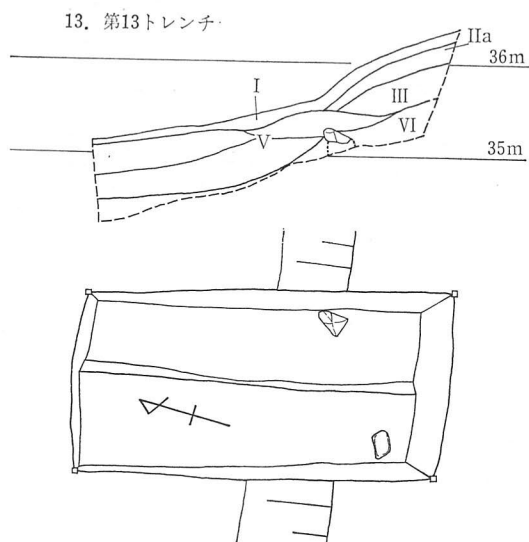
I層 表土。ボンボンの腐植土。

II層 崩落堆積土。しまりの悪い黄灰色土や灰色粘の混入土。

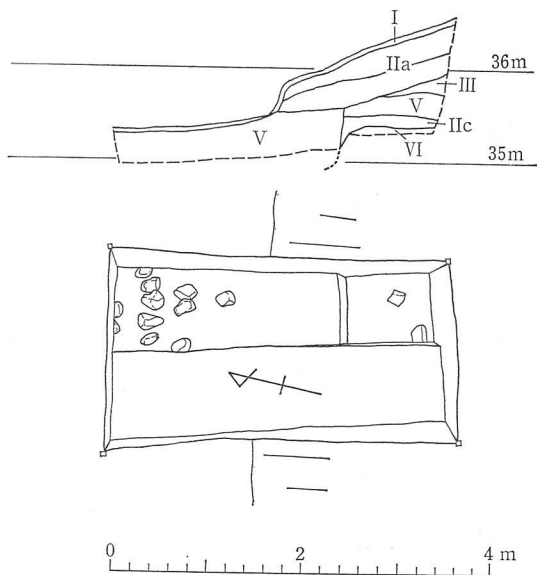
III層 後世の盛土。大きく三段階に分かれる。一番上位が粘土ブロックを含む淡黄灰色土(IIIa層)で、これは、色調の濃淡や粘土ブロックの含有量に若干の差があり、さらに四層に細分できるが基本的に同じ土なので一層とする。中位がややしまりの良い黄灰色粘質土(IIIb層)、下位が灰色砂質土(IIIc層)、いずれも埴輪片、小礫の混入が見られる。

V層 水成堆積土。墳丘側トレンチで見られたものと同じである。

VI層 地山。墳丘側トレンチで見られたものと同じである。



13. 第13トレンチ



14. 第14トレンチ

第8図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(7)
(1/80)

IV層は墳丘盛土に限って使用したので、外堤側では用いない。

第19トレンチ～21トレンチ(第11図20、第12図21・22) I層～V層において共通しているが、第19トレンチでは地山に至っていない。各層とも割合に平坦である。

第22トレンチ(第10図18) 墳丘側第17トレンチのほぼ正面にあたり、第17トレンチと同様地山(VI層)が、他のトレンチに比べて高くなっている(他の平均が標高三五・七メートルであるのに対して三六・二メートルを測る)。地山の上にはIIIb・IIIc層はなく、いきなりIIIa層がのっている。ここでは地山を利用できたので、IIIb・IIIc層を盛る必要がなかったためと考えられる。第17トレンチで述べたとおり濠内を掘削し

たが、こちら側もヘドロ表面下約一メートルで地山が確認された。

第23・24トレンチ(第12図23・24) II層が大きく浸食を受けて、そこへ水成堆積土が厚く溜っている。II層は、ボソボソの状態になっており、本来の色調や硬さ等が明瞭には分らない。両トレンチとも礫が出土したが、水成堆積土内からで、本来の葺石ではない。因に第24トレンチは小さくまばらであるのに対して第23トレンチでは二〇～三〇センチ大のものが一ヶ所にまとまっている。

三、本調査における出土品は、土師器一九片、須恵器一八片、埴輪一九二五片(内、朝顔形一片、形象九片)、炆器四片、陶器一三片、磁器四〇片、瓦器二片、瓦二七片、その他二片の総数二〇五〇片である。

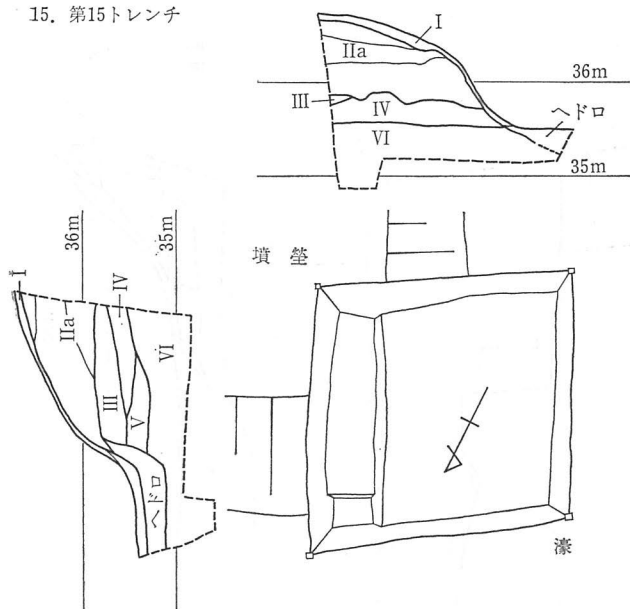
土師器(第13図1、図版七)

甕の口縁部。僅かに残る肩部から「く」の字に開き、口縁端部をつまみ上げている。復元口径は二二センチ。風化がひどく調整痕は残っていないかった。

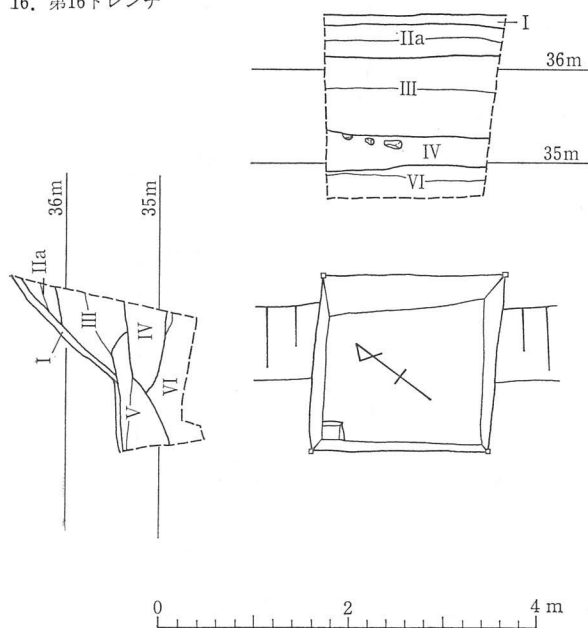
須恵器(第13図2、写真1)

2は甕か壺の口縁部。端部は厚味をもたせている。外面には稜線に区画された櫛描波状文が施されている。3も壺か甕の肩部の破片と思われる。

15. 第15トレンチ



16. 第16トレンチ



第9図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(8) (1/80)

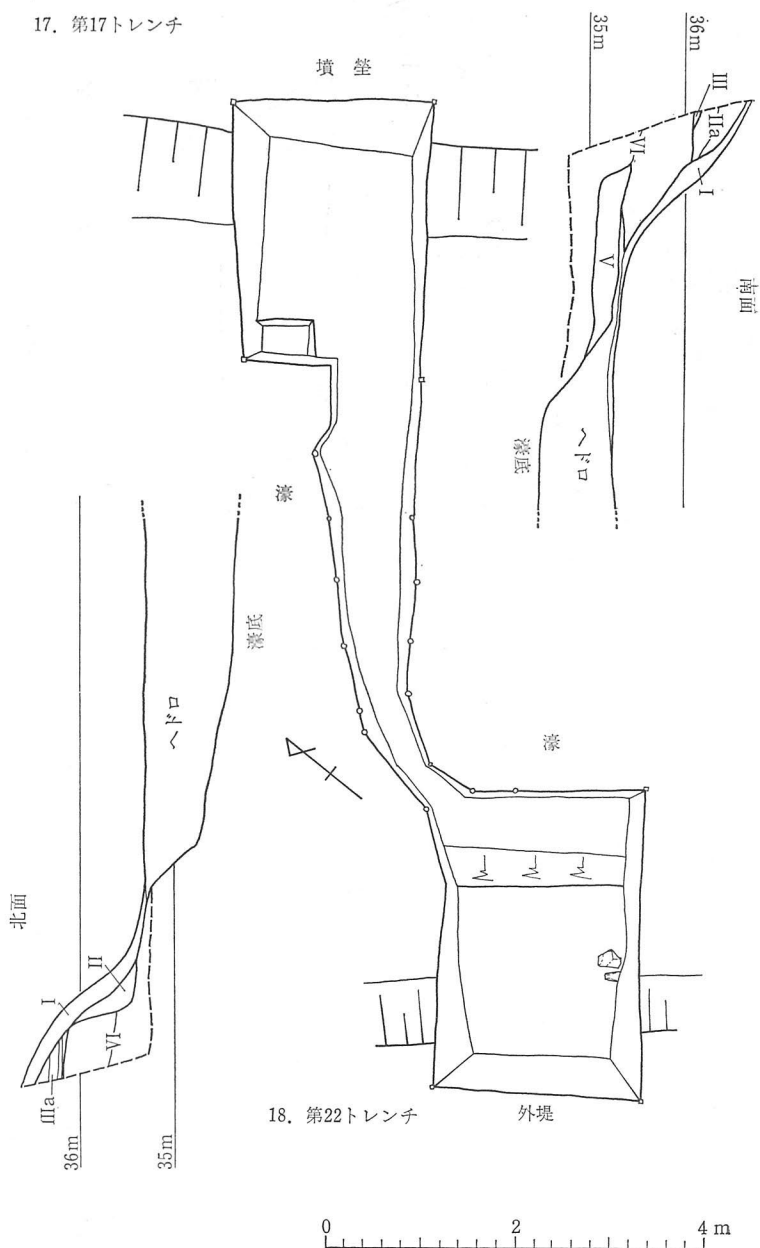
る。内面には同心円の叩き目文が施され、頸部との接合部と思われる面には数条の細い沈線が見られる。4、6は器台脚部。外面には稜線に区画された櫛描列点文(4)や波状文(5・6)がめぐらされている。4の両側面は方形の透しになっていたようである。7、11は甕の胴部と思われる。外面には平行叩き目文。内面には同心円叩き文を施している。同心円叩き文には叩き目の細いもの(7・10)と太いもの(8・9・11)がある。7、10までが薄手なのに対して11は厚手で、接合面も複雑であ

り、底部の可能性も考えられる。12は坏。小片のため蓋か身かは断定できないが、天井部か底部の一部である。中心部から縁辺方向へはゆるい角度のカーブを描き、端部付近では、やや反り気味になる。薄手のつくりであるがこの反り部分は特に薄い。このことからみると器高はあまり

高く（あるいは深く）ない坏と考えられる。外面にはヘラ削りの痕が顕著に残る。

埴輪

埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪は通常の円筒と朝顔



第10図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(9) (1/80)

形であるが、形象埴輪は形が特定できない。埴質のものと硬質のものがあるが、後者の場合、所謂須恵質埴輪と言われている灰色の埴輪の他に赤褐色系の不完全な焼き上りの埴輪も多い。埴質の埴輪に黒斑のある個体は今回認められなかった。

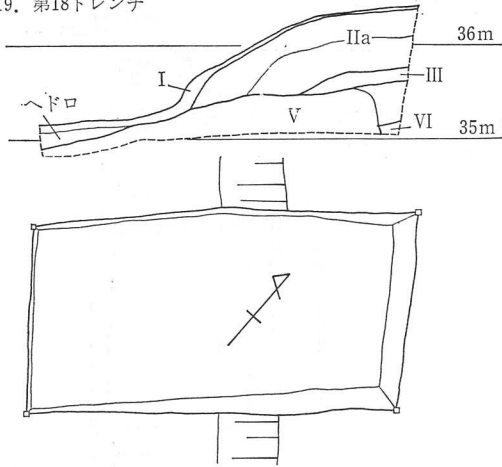
63 図版三(五)

埴輪円筒(第14図13~19、第15図34~38、第16図39~54、第17図55~

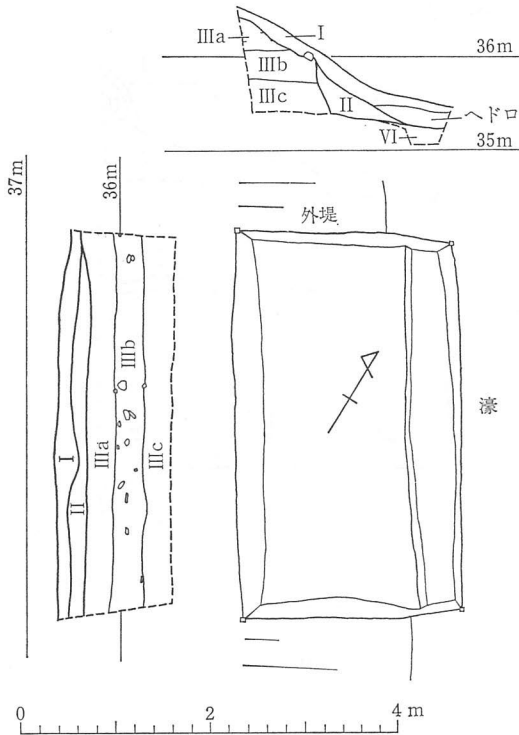
口縁部(13~19)は円筒と朝顔形との区別が難しく、一応円筒としたが、朝顔形が含まれている可能性もある。埴質(13~15・17・18)と硬質(16・19)がある。外面は斜方向の刷毛目が施される。刷毛目調整の

後に沈線文様を施しているもの(14)もある。内面はほとんどがナデ調整であるが、横刷毛目調整(16)も見られる。刷毛目の単位については18の外面がかるうじて読みとれる以外は明瞭にできない。ちなみに18は三・二センチ幅で一五本。その他の一センチ幅における本数は外面で、四~五本(19)、六本(15)、七~八本(13)、八本(16)、八~九本(14)、不明瞭(17)に分けられる。内面は四本(14)が数えられるが、16のように刷毛目が浅すぎて数えられないものもある。口縁端部はほとんど平坦であるが刻み目(17)の入っているものがある。ほとんどが直線的に立ち上っているが、僅かに反りをもつもの(17・19)や上端部が他に比

19. 第18トレンチ

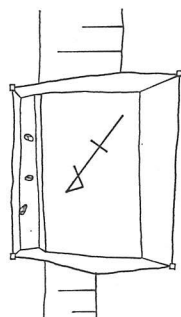
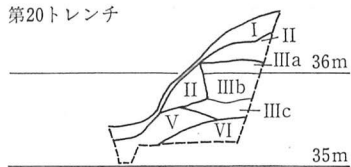


20. 第19トレンチ

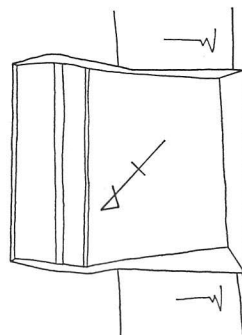
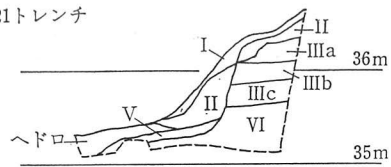


第11図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(10) (1/80)

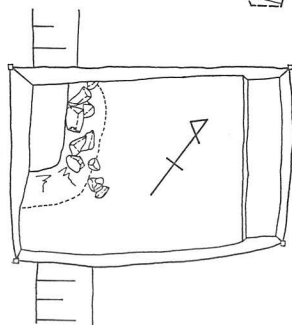
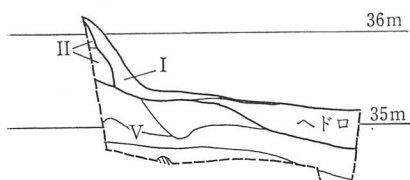
21. 第20トレンチ



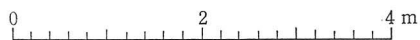
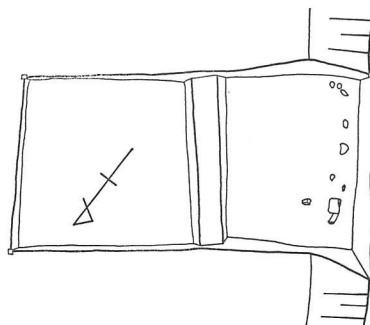
22. 第21トレンチ



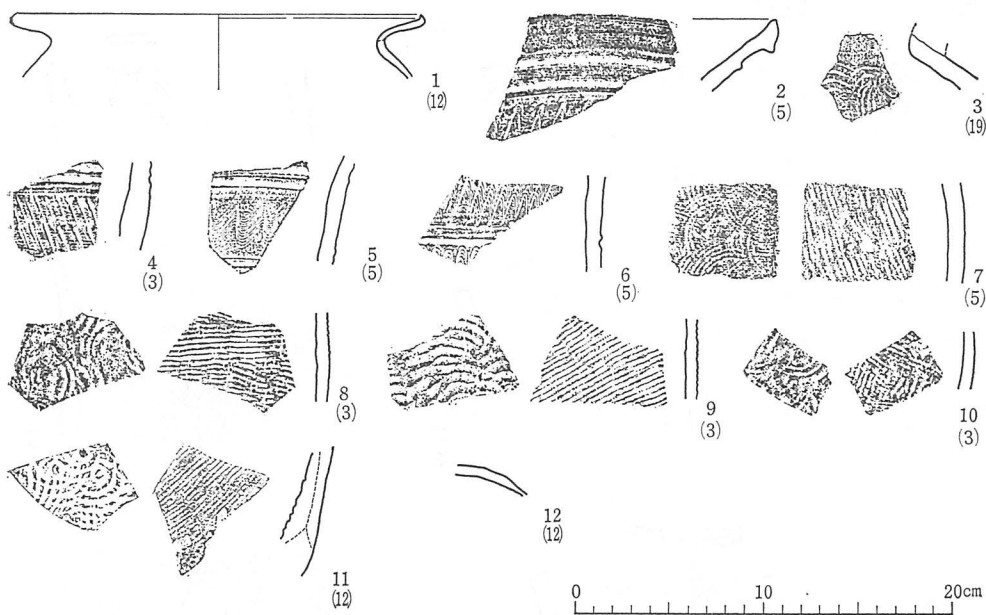
23. 第23トレンチ



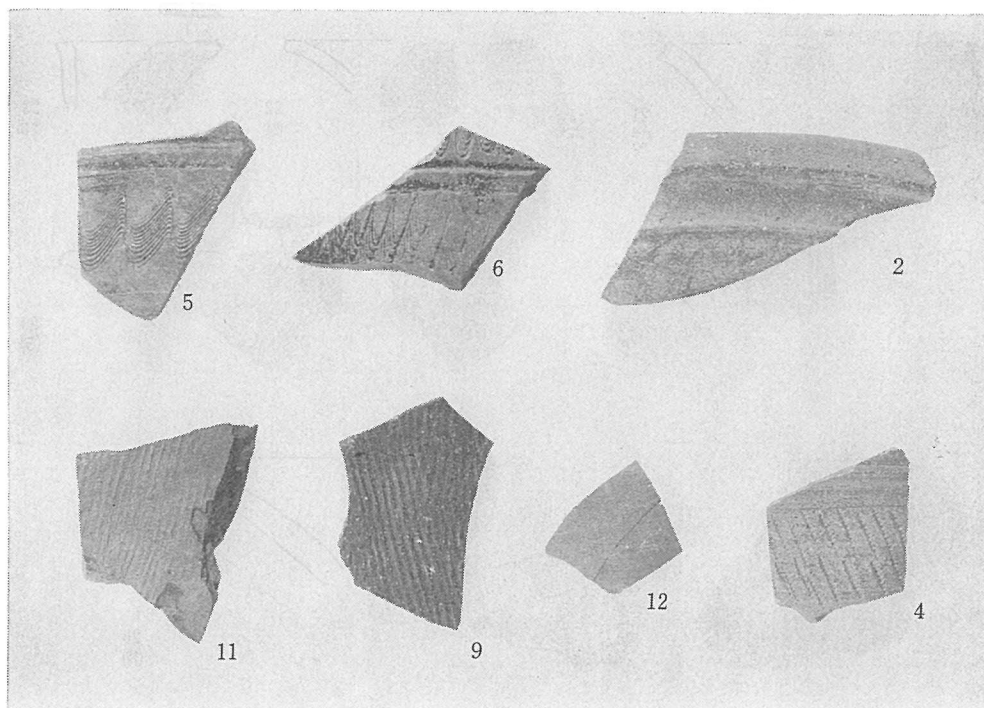
24. 第24トレンチ



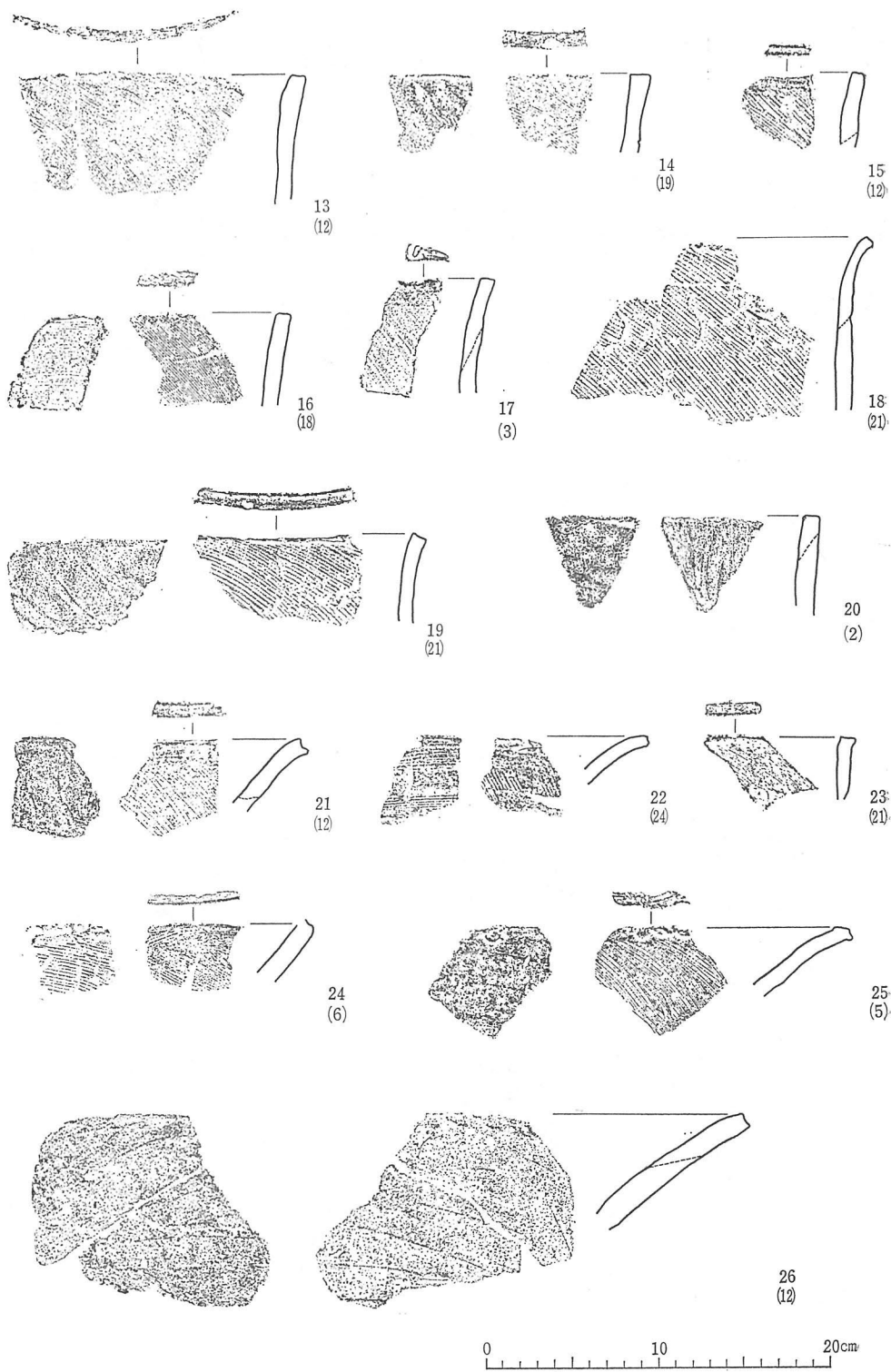
第12図 埴生坂本陵トレンチ平面および断面(1) (1/80)



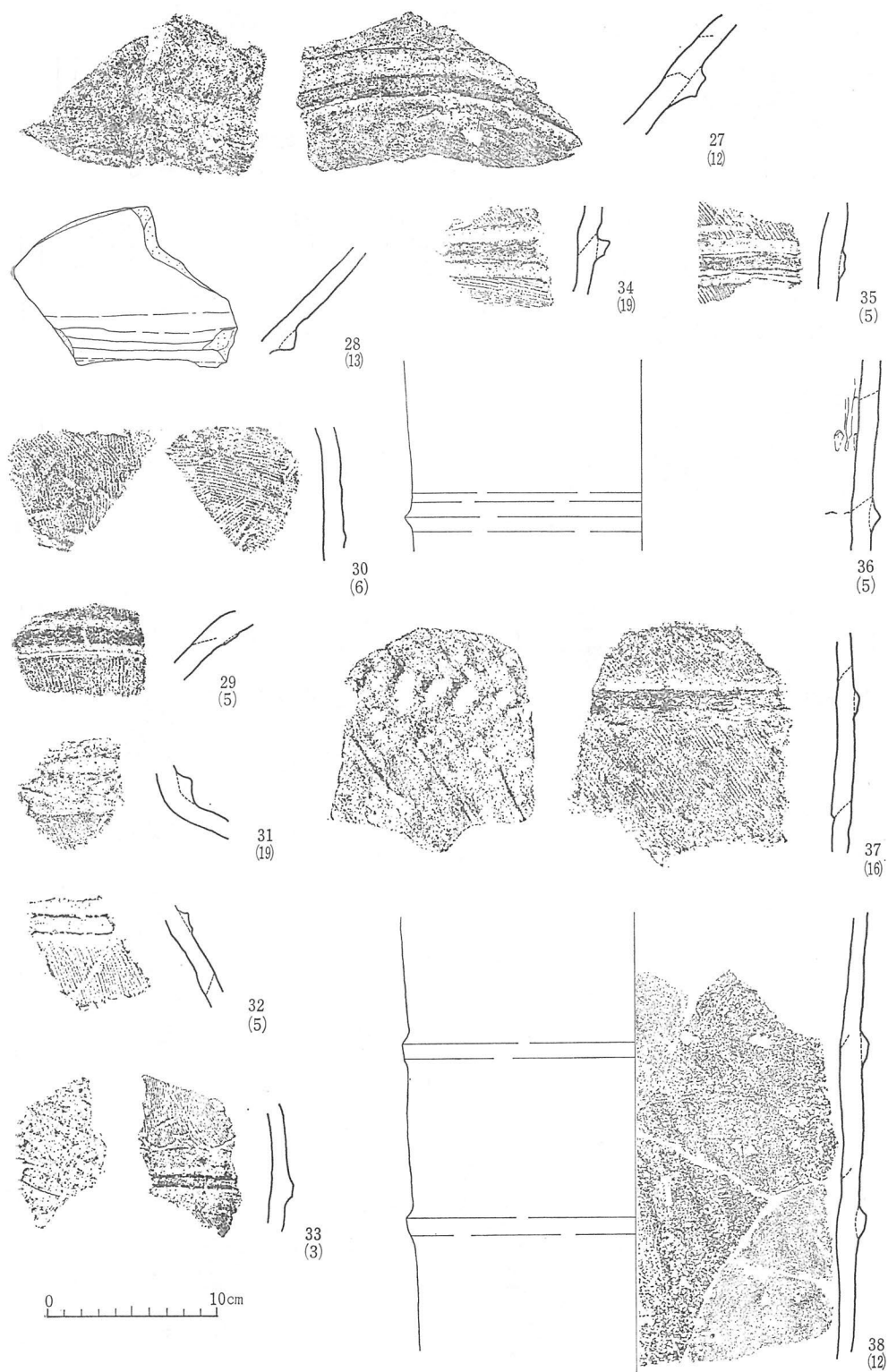
第13図 埴生坂本陵の出土品(1) (1/4)



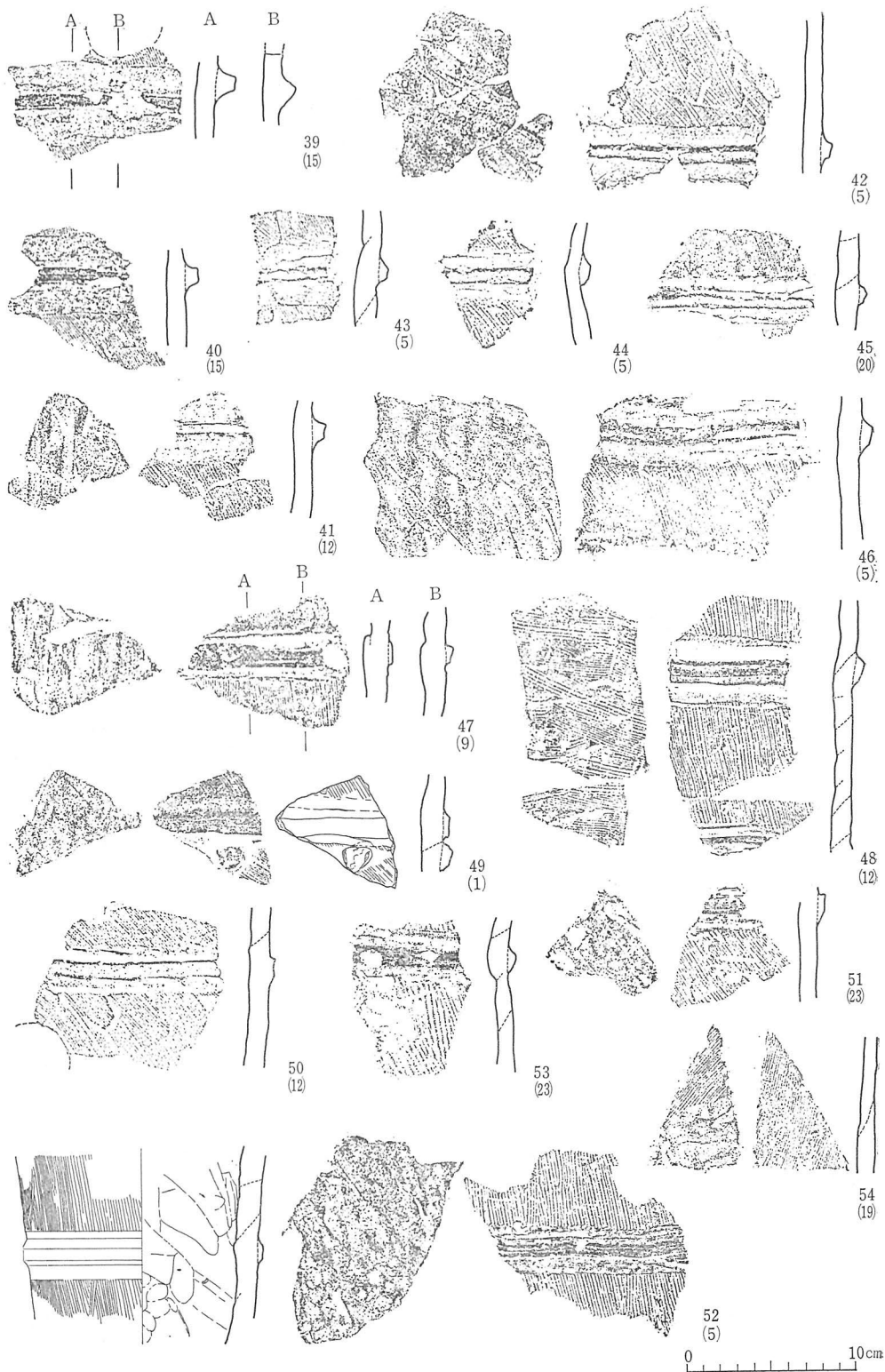
埴生坂本陵出土品の写真1



第14図 埴生坂本陵の出土品(2) (1/4)



第15図 埴生坂本陵の出土品(3) (1/4)

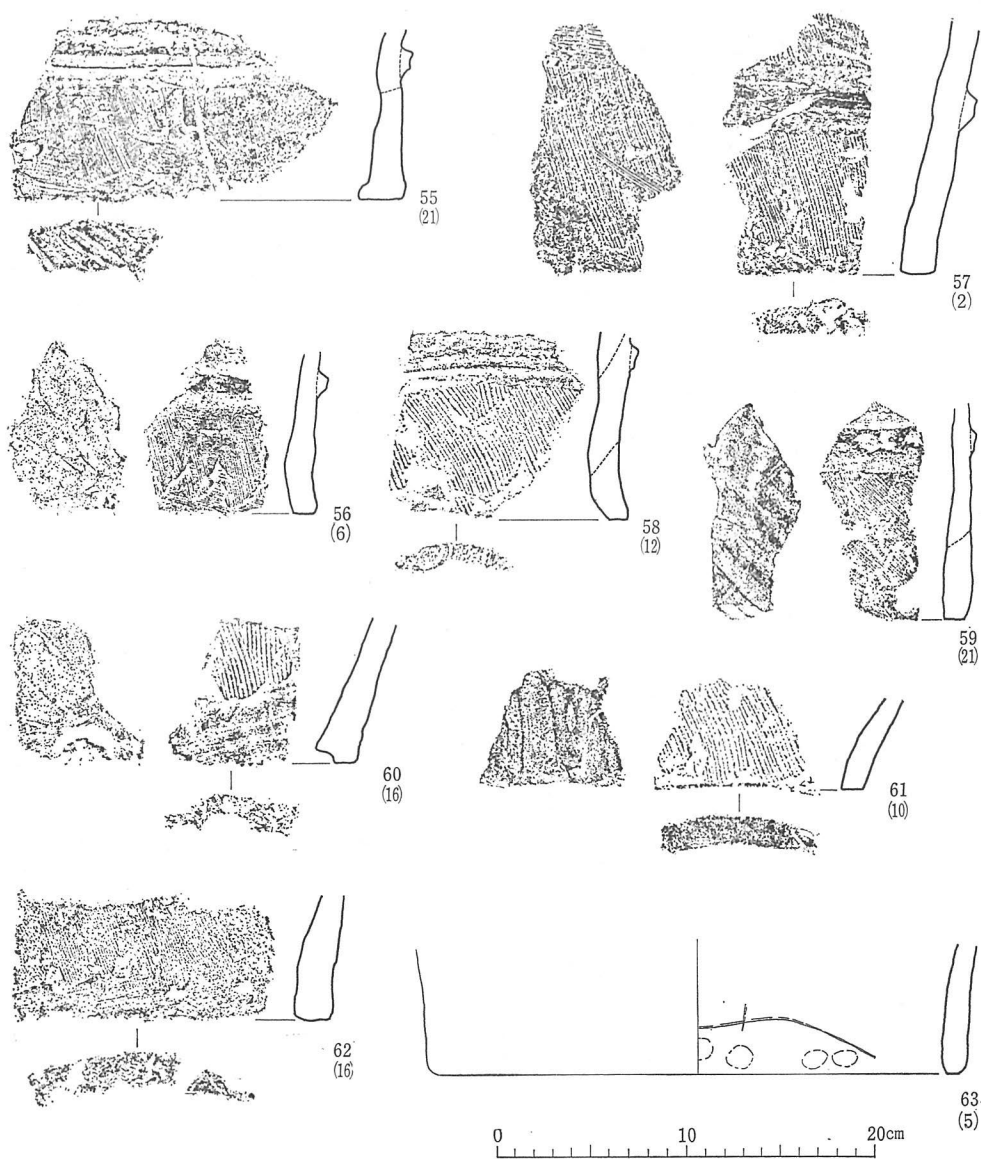


第16図 埴生坂本陵の出土品(4) (1/4)

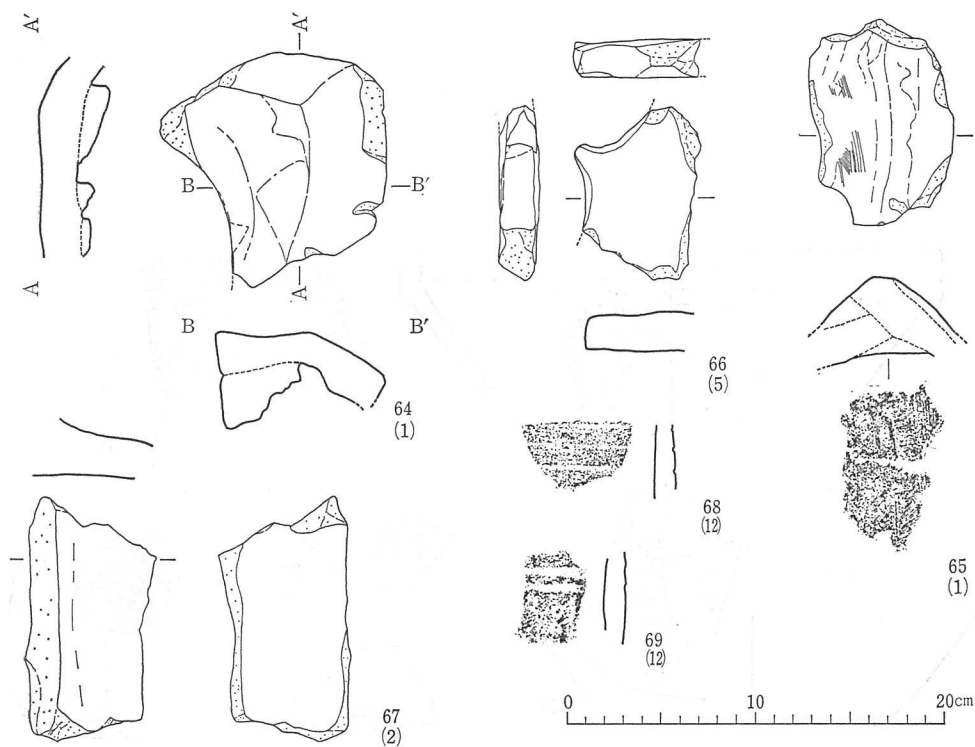
べて大きく外反しているもの(18)がある。胴部(34~54)は34~38が埴質、39~52は硬質である。外面調整は概、斜方向の刷毛目であるが、縦刷毛目に近いもの(47・48・52)もみられる。刷毛目の一単位あたりの本数や幅を明瞭にするべきであるが、刷毛目の境目が重複によりはつきりしないため、敢えて、ここでは断定することをさける。一センチ幅で数えると三本(53)、五本(35・37・41・44)、五~六本(52)、六本(46・49・51)、七本(34・45・47・48)、七~六本(50・54)、八本(39・40・42・43)に分けられる。内面の調整はナデが多く、斜方向(38~40・42・43・51・52)、縦方向(36・41・47)、横方向と斜方向(34)などがある。その他、指おさえ(49・53)、斜方向のナデと指おさえ(37・46・50)、斜刷毛目(48)、斜刷毛目と横方向のナデ(54)がある。突帯は断面形が台形と山形との二種類に大別できる。台形のを詳細に見ると突出度の高いもの(34・39・40)、中位のもの(41~46)、低いもの(35・37・38・47~52)がある。その他の特徴として上辺が下辺より幅が広いこと(34・37・38・42・45・47・48)や一部が工具によってつぶされている点(47)等が上げられる。山形の場合、突出部の頂点が尖るもの(36)と丸味を有するもの(53)がある。透し孔は円形(39・50)のみであった。特種な例として外面の突帯際に粘土の塊が付着しているもの(49)がある。先述した47の突帯をつぶした例は、何かを接着させるための接着面である可能性も考えられる。そのように考えると47は器財埴輪かも知れない。復元により径が割り出せる個体が三点ある。いず

れも現存部の最大径を測ると、36が二八・二センチ(上端部・突帯部とも同数値)、38が上端部二七・三センチ、上段突帯部二七・七センチ、52が上端部一五センチ、突帯部一四・六センチ。基部(55~63)は61~63が埴質、55~60が硬質である。外面調整は斜方向の刷毛目で、上から下まで一気に調整する場合の他に、下端の二~三センチ幅に刷毛目を残し、その上からもう一度調整をしているもの(55・56・62)がある。また、下端にナデ調整痕を残すもの(60)がある。かろうじて刷毛目の単位の分るものが三点あった。55は四・八五センチで約41本(一センチあたり約八本)、58は四・八センチで約二二本(一センチあたり約五本)、62は二センチ中に約一二本(一センチあたり六本)である。その他の場合一センチあたりの本数は四~五本(60・61)、五本(57)、七~八本(59)、八本(56)であった。内面の調整は斜ないし縦方向のナデが多いが刷毛目調整(57)、指オサエ(63)も見られる。底面には工具による刻み目(55)が施されているものや成形の際倒立させるために摘んだ痕のあるもの(60)があるが、底部調整と言えるものは見られない。その他、底面に敷物の痕が残る例(58)もみられる。突帯は断面が台形で、突出度の中位のもの(55~56)と低いもの(58・59)があり、刷毛目調整後貼り付けている。63の復元径は底面が二七・八センチ、上端径が二九・八センチ。

朝顔形埴輪(第14図20~26、第15図27~33、図版三・六) 口縁部(20~26)、頸部(27~30)、肩部(31~33)を認める。28・30が埴質で、



第17図 埴生坂本陵の出土品(5) (1/4)

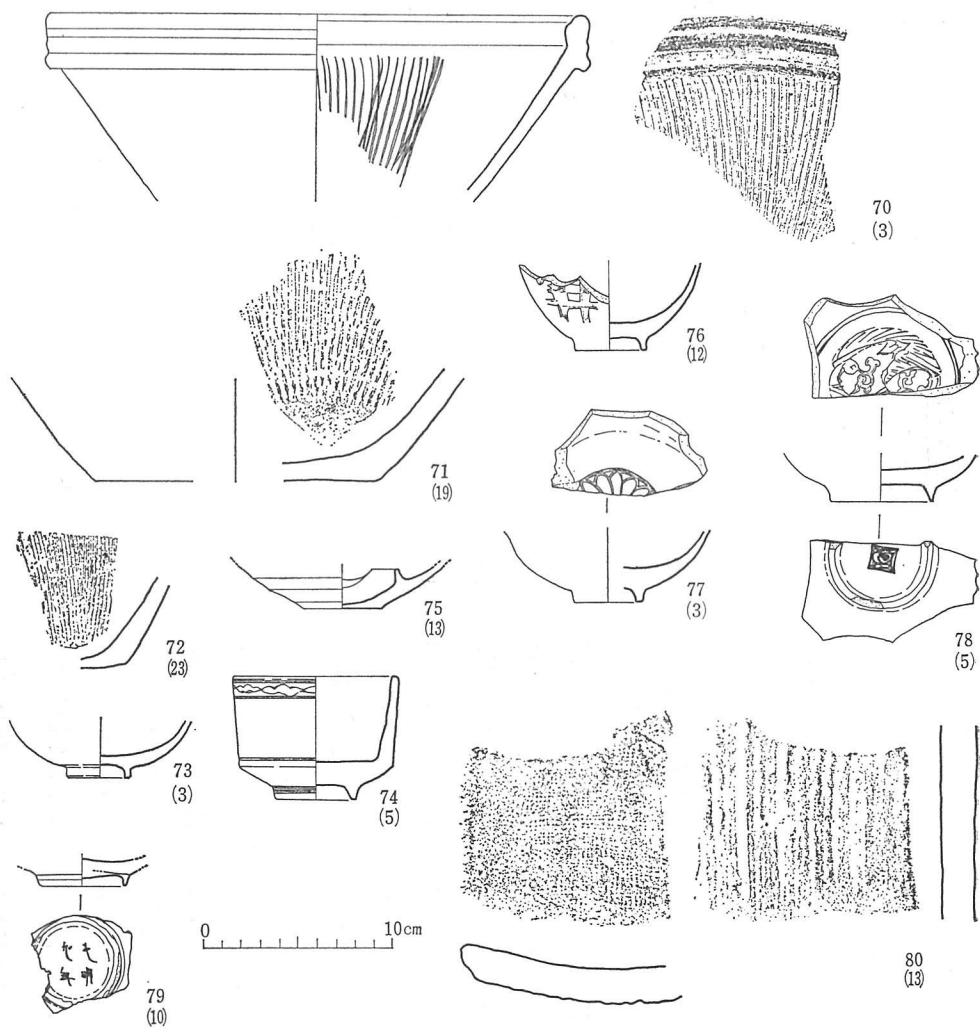


第18図 埴生坂本陵の出土品(6) (1/4)

その他は硬質である。口縁部の正確な角度は分らないが、大体直線的に開いている。頸部も直線的であるが突帯が水平になる傾斜から推定して四五度前後の角度で開いていたものと思われる。肩部も、やはり突帯からみて、肩の張りが強いもの(31)とあまり強くないもの(32)とがある。33は肩部と胴部の境目と考える。上方の様子は分らないが、ゆるい曲線をもって胴部へ移行している。外面調整は斜方向の刷毛目(21~25・30~33)、縦方向の刷毛目(29)、ナデ(20・26・27)が見られる。内面調整は斜方向の刷毛目(24・30)、横方向の刷毛目(22)、ナデ(20・21・25~27・32・33)である。突帯は断面形が台形(27~29・32・33)と山形(31)が見られ、突出度の高さを見ると、中位のもの(27・28・31)、低いもの(29・32・33)に分けられる。28は側面が磨減して、山形のように見える。32はくずれた台形である。刷毛目の単位が明瞭に認識できるものは少なく、21の外面で二二センチ中に14本、30の内面で二・八五センチ中に約16本が確認できただけである。その他は、一センチ幅につき、外面で五本(22・30)、六本(29・32)、七本(23)、八本(24・25・33)、九本(31)、内面で六本(22・24・30)である。

器財埴輪(第18図64~69、図版六)

器財形としたが器形を断定するのは難しい。いずれも埴質である。64は原形不明で、断面形は「く」の字を呈する。片面は何ら



第19図 埴生坂本陵の出土品(7) (1/4)

の特徴も見られず、その裏側には粘土塊が貼付されている。挿図（第18図64）中のB面は曲線的に仕上げられている。裏面に貼付された粘土塊は、このB面のみが調整されている。全体的につくりが粗く、器肌面もひどく風化しており、調整痕は全く残っていない。65は家形埴輪の屋根部（棟）を思わせるが、周囲四辺とも欠損しているため、断定できない。表と思われる側の斜面とその裏側の面には僅かに刷毛目が残る。粘土の接合痕を見ると、粘土をやや斜めに積み重ね、片側の斜面を作り、その後、反対側の斜面を同様に積み重ねている様である。最高長約四・一センチ。66・67は扁平な板状を呈するが、ほぼ周囲を欠損している上、調整痕も全く残っていない。ただし66は側面の一部が残っており、平面形を見ると、何らかの突起部分のようである。盾か蓋の可能性がある。最厚部は二・二センチ。67の場合は、扁平とは言へ若干厚味に差がある。盾形の胴部との接合部分である可能性が強い。最厚部四センチ、最薄部二・〇五センチ。68・69は薄い小破片で、共に片面に平行する沈線が施されている。68は現状では三本であるが、もっと多い可能性があり、69は二本だけのようである。その他の調整痕は全く残っていない。

陶器（第19図70～74 図版七・八）

碗（73・74）、灯明皿（75）、擂鉢（70～72）などがある。73は唐津。低く直立する高台部から緩い曲線を描きながら胴部へ移行する。高台部を除き茶灰色の釉がかかり貫入が見られる。74は高台部が低く、直線的に大きく開く底部から急角度で立ち上がり口縁部へ移行する。淡褐色の

素地全体に淡灰色の釉がかかり、口縁部に二本の横線に挟まれた雲形文様、底部に一本、高台部に二本の横線が施されている。横線が淡灰青色であるのに対し雲形文様は濃青色を呈する。釉面には貫入が見られる。75は口縁部を欠損する。外面にはヘラ削り整形痕を残す。内側に棧がつけられ、その一ヶ所を半円形に切り取っている。内面のみに灰色釉がかかる。70は復元口径二九・一センチ。口縁部は厚味をもつが胴部は、やや薄い。外面はヘラ整形。内面には、間隔がやや広目の卸し目を施している。内外面共に釉はない。一八世紀の堺産。71は底部で、卸し目の間隔が狭いことを除けば70に似ている。72は外面ナデ整形。内面の卸し目の間隔はさらに狭い。釉は施されない。71・72とも時期、産地は不明。

磁器（第19図76～79、図版八）

染付の碗（76・77）と皿（78）、器形不明品（79）である。76・77とも低い高台部から丸味のある胴部へ移行するが前者は急な開きを示し「井」の字と思われる図柄を呈する。後者は、緩やかに開き、内面底の図柄は菊の花と思われる。78は高台の径が76・77に比べて大きく、内面も広い。内面の図柄は草花類と思われる。底裏面の染付は角福である。79は伊万里の染付の碗か皿。高台部の付根に二本の平行線が施され、その内部には「大明年製」の年款が見られる。

瓦（第19図80、図版八）

焼成の悪い平瓦。凹面に布目、凸面に網目が残る。厚さ約二センチ。

（佐藤 利秀）

まとめ

以上、今回の調査概要と出土遺物について述べてきた。最後に全体をまとめて報告の終わりとしたい。

仁賢天皇埴生坂本陵は、羽曳野丘陵の縁辺に位置する前方後円墳で、古市古墳群のなかにあつて、前方部を西に向けるグループに含まれる。墳丘長は一二〇メートルほどとされ、古市古墳群内にあつては中規模の前方後円墳である。

本陵の立地は自然地形に大きく影響されていると考えられる。先述したようにその位置は羽曳野丘陵縁辺の洪積段丘の下位面にある。現状でも駐車場のある高さから拝所に向かって傾斜角六度ほどの斜面となっている。墳埴もこの傾斜面にあることが今回の調査により確かめられた。すなわち前方部側は地山を削り出すことによって築造し、後円部側は地山の低さを補うために版築状の盛土をもって基底の高さを揃えている。版築状の盛土（第IV層）が明瞭に認められるトレンチは第6トレンチから第10トレンチである。このような版築状の盛土は、藤井寺市矢倉古墳においても検出されている。盛土は暗灰紫色の粘質土と暗褐色土を交互に積み固めたもので非常に締まりのある土層になっている。

墳埴端部については、第12トレンチのみで本来の葺石最下段（根石）を確認した。葺石は第7図に示したように最下段の石材は横位に使用し

その上の石は縦位に使用する状況が伺える。葺石の量は転落したと思われる石材を含めても、墳埴斜面全体を隙間なく葺くには少ないように感じられる。使用される石材は石川流域で採集されたと思われる凝灰岩系の川原石を使用する。その他のトレンチでは確実な葺石（根石）をもって墳埴裾を確認することはできなかった。前方部と外堤に設定した第17トレンチと第22トレンチは、結果的につながって土層の状況を観察し得たが、堆積土（ヘドロ）の下はすぐ固くしまった砂質の地山となり濠底は平らで、転落したような石材も確認されなかった。よって周濠は何度かの底浚え、もしくは掘り下げがなされていることが予想される。それを裏付けるように、地山を削り出して整形したと思われる墳埴上に近世陶磁器片、川原石を含む土層が見られ、この土は濠の浚渫によって生じた土を墳埴上に盛り上げた結果と考えた。この事は外堤に設定した第19トレンチのⅢb層でも確認できる。さらに第14トレンチ東側土層で見られるような垂直の掘り込みも、濠の浚渫、もしくは拡張に伴うものであると考えている。同じトレンチ内で検出された、意識的に四から五個並べられた石材も古墳築造時本来のものではなく、後世に墳埴裾に手が加わっていることを考えさせる。外堤においても本来の裾は検出されていない。先述したように第19トレンチの土層断面の状況から浚渫などによる盛土が認められ、結果的に外堤の嵩上げがなされたと思われる。仁賢天皇陵の外堤は左右対称形ではなく北側のコーナー部分が直角に近いことから、「片直角型」の前方後円墳とする意見もある。しかしながら今

回の調査では外堤がどれほど本来の形状を残しているかの検討は行えず確認することはできなかった。また、本陵の特徴として墳埴に対して周濠が均等な幅になっていないことが指摘されている。このことは最初に述べたように、後円部が低く前方部が高いという本陵の自然地形が大きく作用し、それ故周濠に水を溜める際に生じた結果ではないかと考えている。

つぎに出土遺物であるが、第14図～第17図に示したように円筒、朝顔形埴輪が確認でき、形象埴輪については盾形埴輪と思われる破片があるが明瞭ではない。そのほかの形象埴輪については器種を特定するまでには至っていない。前回の外堤の調査時に出土した埴輪と大きく異なる特徴は看取できず、野々上埴輪窯の製品が供給されていると考えてよい。そのほか須恵器片が出土しているが、いずれも小破片が多く、型式学的な観察が難しい。しかしながら第13図12に示した破片や、第13図4～6の筒形器台などはある程度の时期的なまとまりを持つように考えられる。

また、第13図1に示した土師器口縁は器面の摩耗が激しいが、口縁端部が僅かに上方につきまみ上げられた特徴を示している。出土した層位はV層の灰色粘土層であり、この層からは埴輪片、須恵器片とともに近世陶磁器片も出土しているため層位的な検討はできないが、形態的な特徴から出土した須恵器と同じ時期の土師器として考えられよう。埴輪、須恵器、土師器の編年的な並行関係を知る資料と位置付けられる。

今回の調査結果から、墳埴裾及び外堤裾護岸工事は予定通りに施工し

た。

(徳田 誠志)

仲津山陵見張所改修区域の調査

応神天皇皇后仲姫命仲津山陵の前に位置する見張所の改修を行うことになり、平成三年十月七日から九日までその基礎部及び汚水枳設置部分の掘削に立ち会った。

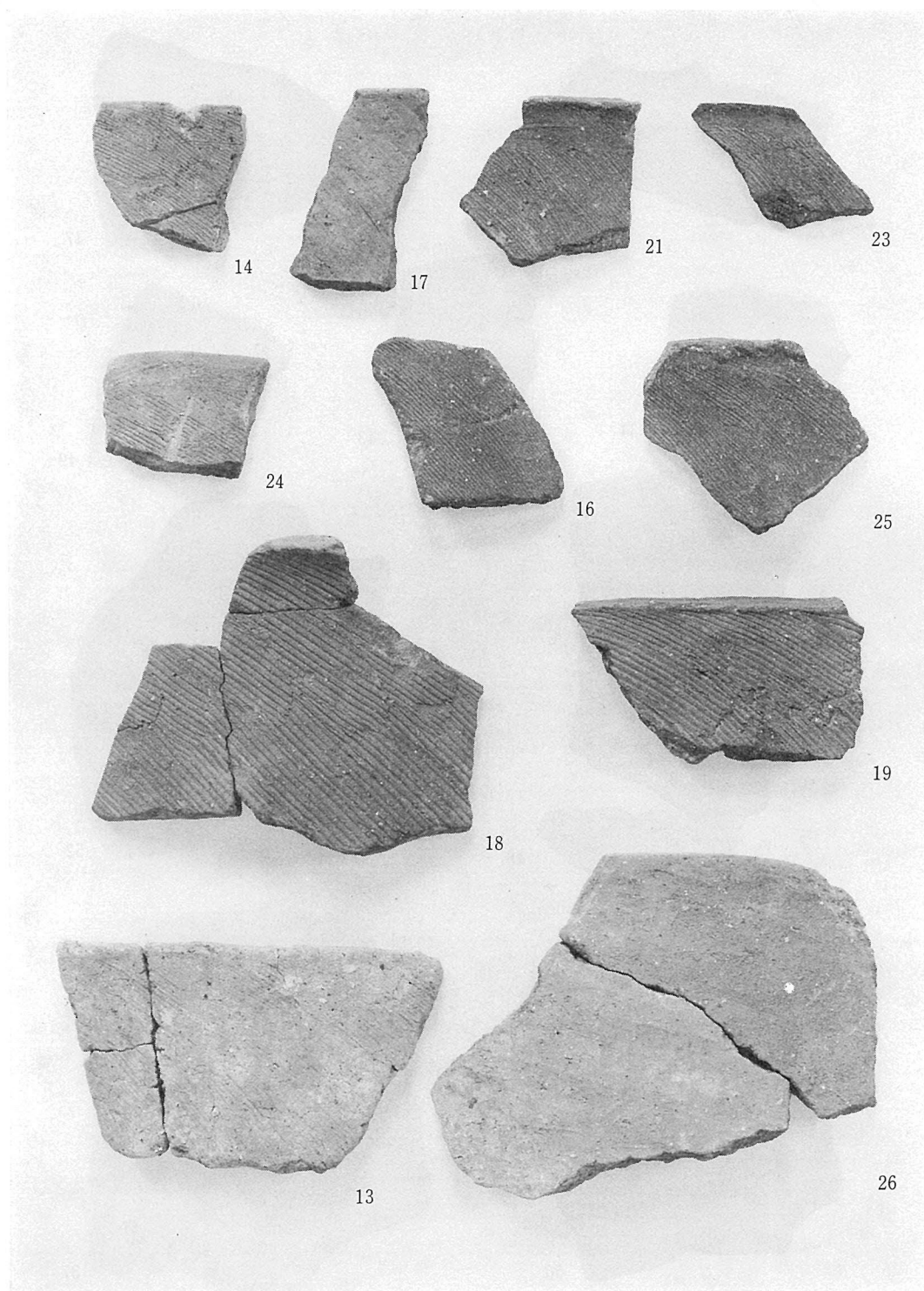
拝所は陵前の北西隅にあたる部分であり、調査区は旧見張所を撤去した跡地である(第20図)。調査区域は見張所基礎部分(五メートル×三メートル)を幅一・〇メートルほどで、深さ〇・八メートル程度掘削したほか、汚水枳設置部分(一・三メートル×一・三メートル)を深さ一・三メートルほど掘削した(第21図)。その結果厚さ二〇～三〇センチの表土(I層)の下は、調査区の西半分においては、参道脇の石積み工事の際に攪乱を受けており、検地石の石くず等を多量に含む、締まりのない暗灰色小礫混じり土(II層)となる。同じく東半分は拝所部分の石積みを行った際に攪乱を受けており、また、旧見張所時代の茶碗、急須などを投棄した際の埋土など、締まりのない攪乱層(II層)である。その下の表土下一・二メートルほどのところから淡灰褐色砂質土、もしくは明褐色粘質土からなる非常に堅く締まった層があり(III層)、これが地山と思われる(第22図)。仲津山陵の外堤については拝所北側の民有



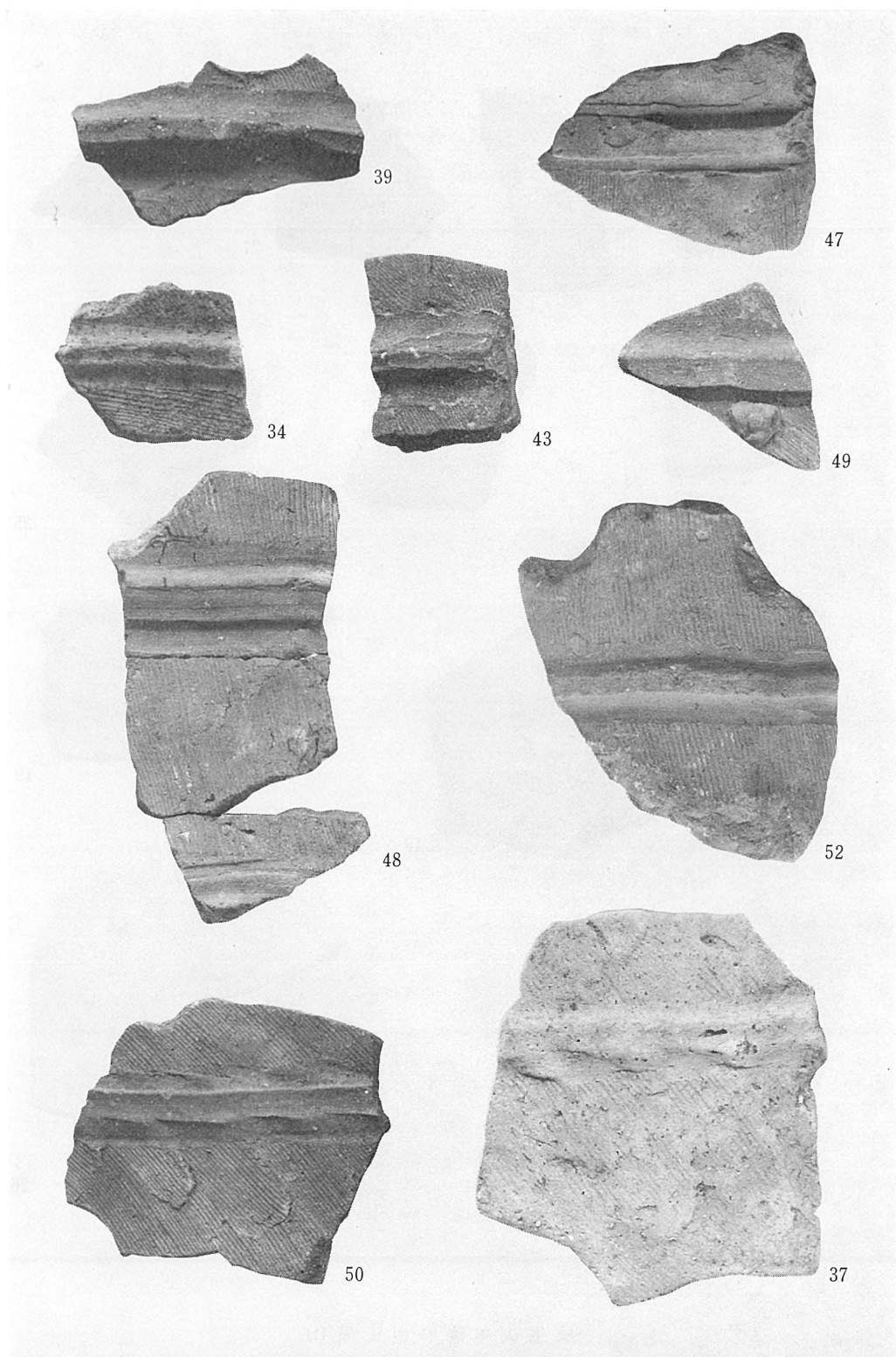
1. 埴生坂本陵 第7トレンチ墳丘盛土検出状況（南から）



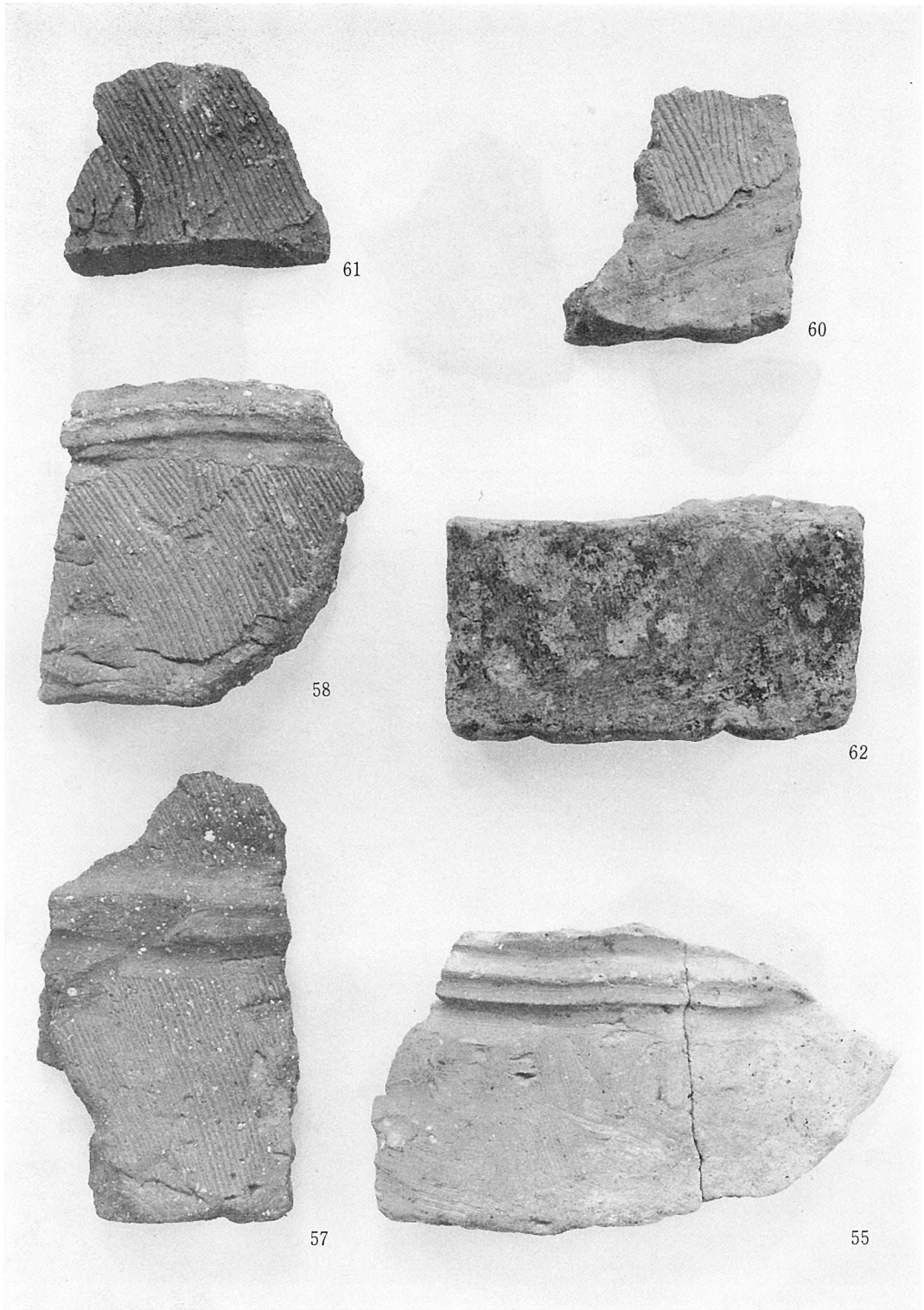
2. 埴生坂本陵 第12トレンチ葺石出土状況（北から）



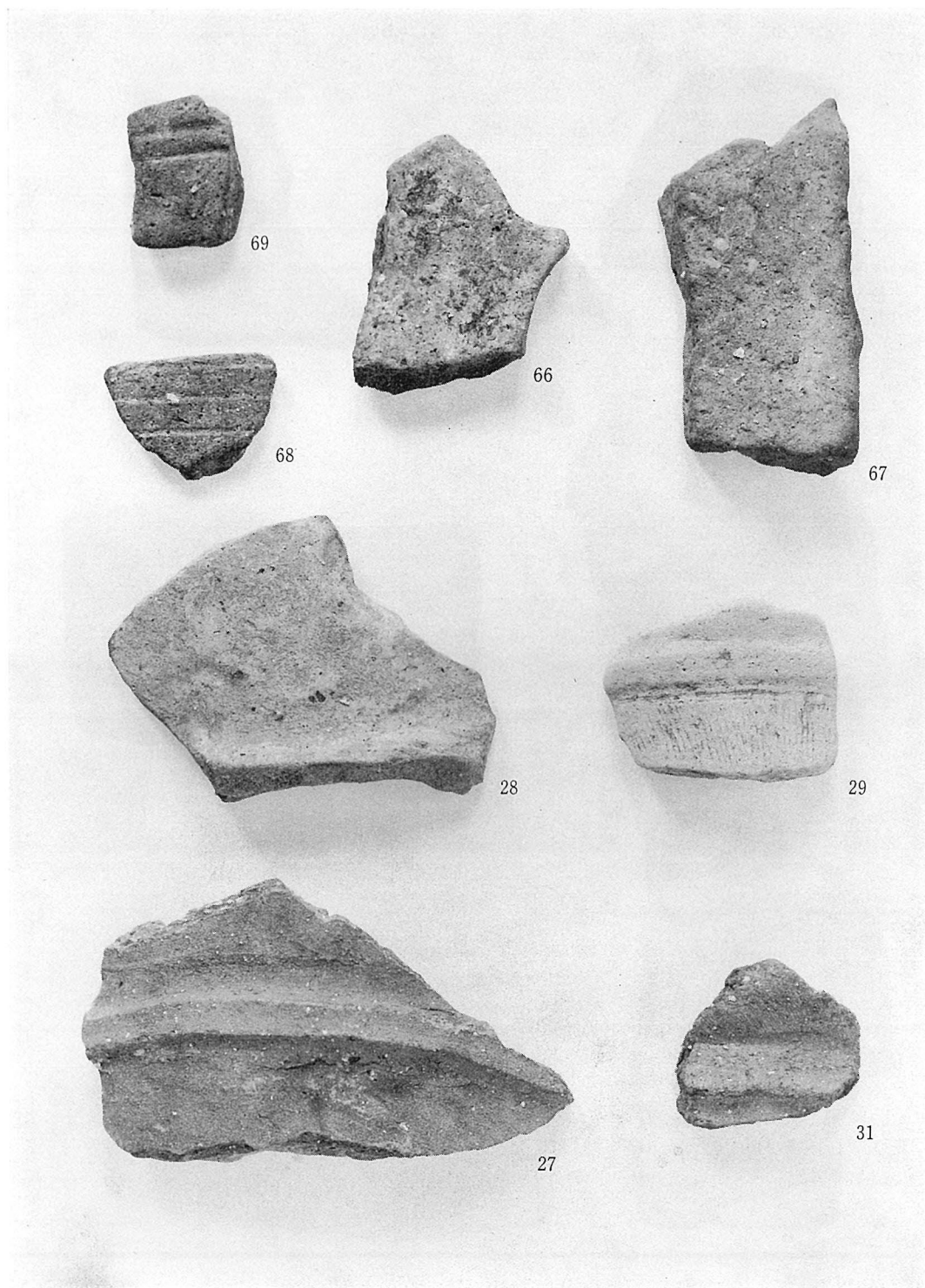
埴生坂本陵の出土品(1)



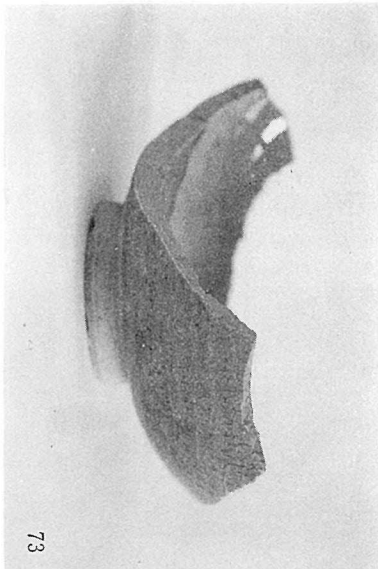
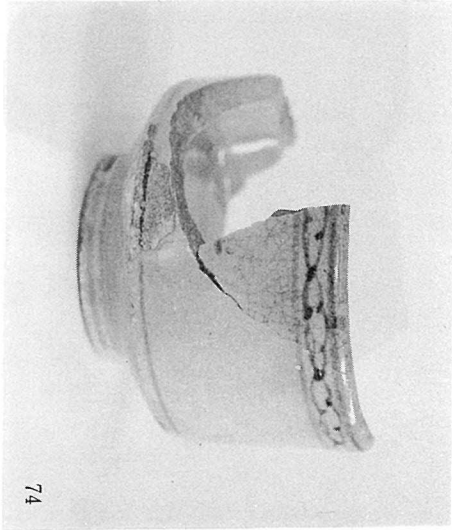
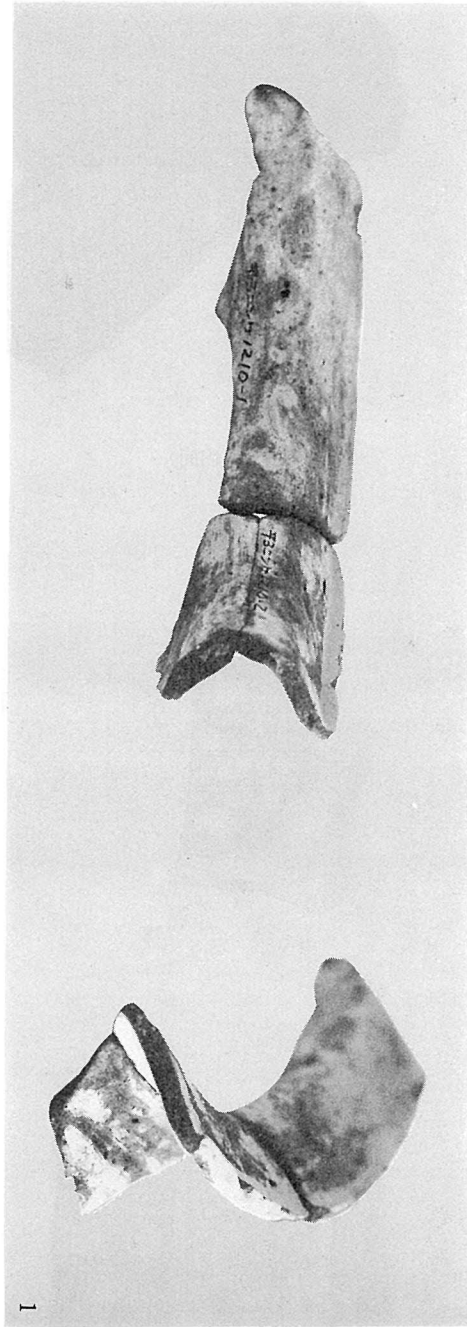
埴生坂本陵の出土品(2)



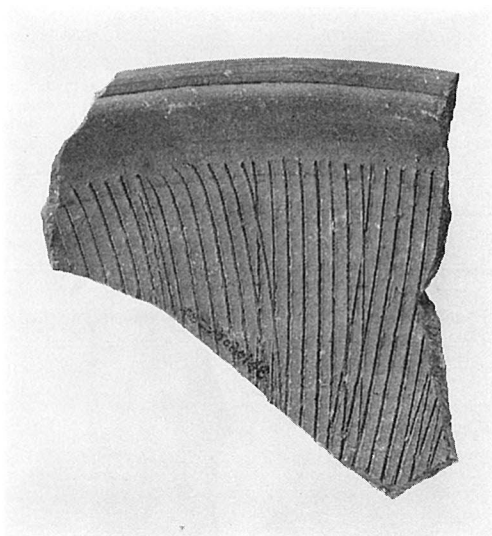
埴生坂本陵の出土品 (3)



埴生坂本陵の出土品(4)



埴生坂本陵の出土品 (5)

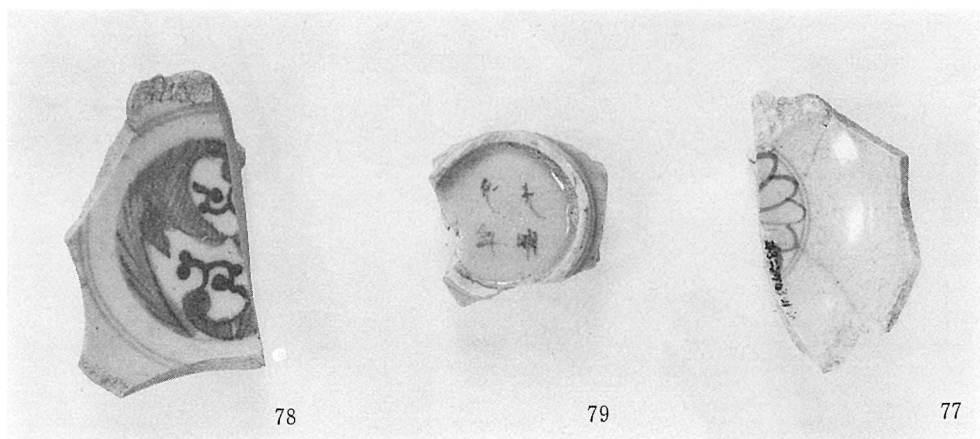


(内面)



(外面)

70



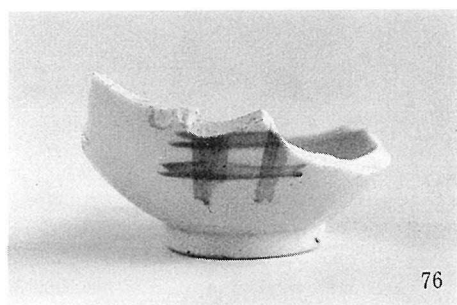
78

79

77



80



76

埴生坂本陵の出土品(6)